

今なぜ花育なのか ～花育基本理念の周辺からみる～

花育推進検討委員会委員長 今西弘子



花育のイメージについて、花関連の専門学校生のコメントに次のようなものがありました。「学校の花壇に、みんなで同じように花を植えて、同じような生長を観察す

る。準備された花材を使って似通ったアレンジを作り、お母さんのお土産にする。花業界の仕掛けた少し無理のある活動」。

この意見に代表されるように、花育普及の大きな問題点は、花を愛する人、花に関わる人々の賛意、同意を必ずしも得ていないところだと思います。その原因を明らかにするために、基本理念の周辺から、もう一度花育のあり方を考えてみようと思います。そしてその内容に共感していただけるなら、花育の内容にそれを加味した方向を検討していただくか、しなくても、知識として持っていただくだけでもよいと思います。

花育の基本理念（要旨）

おもに日常の生活空間に、ふさわしい花や緑を取り入れ、幼児・児童が花や緑のある快さを身近に感じることのできる環境を整え、幼児・児童1人1人が花や緑のある快適環境の創造に参加しようとする姿勢を育み、健全かつ多様で豊かな心身を育成する教育活動。

なおこの「花育」の推進には、平成2年大阪開催花博のテーマとされた現代人の課題である「自然と人間の共生」と生態系等への配慮としての「自然破壊を回避し、健全な状態に保全すること」がこの理念に含まれるものとする。（花育活動推進委員会）

花育基本理念の前半は、①(幼児・児童が)花や緑のある快さを身近に感じることのできる環境を整える、②(幼児・児童が)花や緑のある快適環境の創造に参加しようとする姿勢を育む、としています。

花育は、①②からスタートします。実習の前に花や緑に親しむ機会をできるだけ多く持つようにします。たとえば、身近な花や緑の様子や変化などを繰り返し観察する、花や緑の世話をする作業、飾る作業などを見学する、花や緑の名前を知る、花の話を書く等々。花育は、将来花緑に親しむことのできる素地を作るのが主な目的です。

花育基本理念の後半は、①自然と人間の共生、②自然破壊を回避し、健全な状態に保全するとしています。花育の内容すべてが原則的にこの①②に反するものであってはなりません。花育実施・指導者は①②に反することないように、努力・工夫をする必要があります。

命を扱う花育を通して生命の意味や大切さを伝える細心の注意が必要です。芽が出ない、花が咲かない等、うまく扱えなかったときの心のケアも十分に。

花育の必要性

自然を分類すると、人間の手が加わっていない自然を大自然(一次自然)。人間が手を加えた自然を中自然(二次自然)、これは人が利用しながら生態系の多様性を継続、保存しているものです。そして小自然。これは公園や庭、花壇などでしょう。

共生とは、支え合う関係、ふつう片方のみが利益を得る関係は指しません。花育では、少なくとも生態系の破壊を回避する方向の共生を基本とし、使用する植物の検討(環境・生態系への負荷他)が必要です。

古い時代、花と緑(=植物)と祖先たちは必然的に共生する密な関係でした。現在、花と緑との密な関係はほぼ失われてしまいました。そこで花育の必要性が浮上しているのです。

花育以前の問題として、都市や屋内という「究極の不自然」の中における花や緑と人とのかわりかは歴史的にみても、まだ端緒についたばかりです。データの集積や花育を実践する中から、それぞれの地域(人と自然)にふさわしい花育のあり方を考え、作り上げることが必要です。

花育の目的は、花や緑の持つ機能(花育推進方策に記載)を効果的に活用し、①生活空間の花や緑を眺めた

りふれたりすることによって、心身を癒し、リフレッシュさせます。②知識や体験を盛んに吸収する過程にある幼児・児童が花や緑に親しみ、育てることで、命の営みに触れる。これは情操面の向上、体験活動の効果が期待できます。③花を介した世代間交流、地域活動。これは地域とのつながりを深め、人とのふれあいを身につけます。

現代の日本人が好む花

今の花店の花の約70%は、18～19世紀のヨーロッパの王侯貴族が楽しんだ花に由来するといわれています。貧しい植生の国の人々が外(国)から持ち込んで楽しんだ花を豊かな植生の日本に持ってきているのです。今後の未来を担う子ども達に伝えるものがそれでよいのか。過去の園芸にとりつかれないで、今後を見通した花育を考えて実践していただきたいのです。

花に関するアンケートを繰り返した結果、花を美よりもやすらぎ、自然とイメージする人が多いようです。好まれる花の平均像は、季節感のある、自然の野の雰囲気を持つ、他の花とは違う適度な特徴のある花、軽い感じの、薄い花びらと、折れそうに細くやや長い花首をもつ、白かごく淡い色の、小ぶりの花、やすらぎとやさしさと、やわらかさの感じられる花。すなわち「軽・薄・淡・小」の花、「3Y」の花となります。

反対にあまり好まれない花は、一年中目にする季節感に欠ける花、元々のその花らしさが失われて、どれもがバラやダリアのようにはややかで改良の進みすぎた感じの花、花びらが厚く、重い感じの、花首が短く太い花、濃い、派手な色の大きな花、野の花であっても、ありふれた花、粗野な感じのする花、「重・厚・濃・大」の花となるでしょう。

私たちの自然観、価値観が大きく変化してきています。1970年代に、自然観は人間のための自然環境保護から、人類が生き続けるために、人間が我慢をしても生態系の機能を維持するようになりました。価値観も、開発、技術、工業から、自然環境保護へ。量的なものや物の豊かさから、質的なものや心の豊かさへ、金権支配から連帯意識、コミュニティ重視(身近な人々との良好な関係)などに変化しています。

この大きな変化の中で、花の見方も変化して当然です。花育指導者は社会の変化に関心を持つ必要があります。

地域性と多様性

地域(=コミュニティ)は人と自然から成り、ひとつひとつ

それぞれに独自性があります。地域で行われる花育も同様です。

花育は、地域の人と自然を大切に、好きになることから始めたいと思います。地域を重視する花育活動には、祭事、行事等にかかわる植物や、原植生(またはそれに近い)、自生の花、すなわち「和の花」を積極的に取り入れましょう。社会的に容認されやすい花育のかたちはここにあるかもしれません。

長く土地の暮らしと深く関わってきた地域の原植生、自生の花の大切さ、価値(花育活動推進方針に記載)をわかりやすく子ども達に伝えましょう。

そのためには花育指導者の植生への知識、理解、納得の徹底が不可欠です。花育推進、継続、発展の原動力となる「この地域だけの」「この地域ならではの」ものです。これは地域の活性化、観光資源としての利用につながります。人の側の都合ではなく、季節や植物の側の都合に合わせた花や緑の楽しみ方も伝えます。自然の花・野の花と、生活の中で楽しむ花(生産花卉)を分けてそれぞれの役割や大切さを伝えます。

多様性について、花育では生態系破壊などを回避する姿勢を明確にします。雑多にみえる日本の植生を快いと感じる感性を育みます。たとえば使用材料は単一種利用より混種、混植等の方向へ。多様な動植物が棲み分け合う豊かな生態系とします。

古くから、茶畑周辺のススキなどが育つ「茶草場」は自然の宝庫、多様な植物が育っています。里山、茅場、茶草場は人と自然が支え合う中で多様性を保全してきました。このようなシステムに類似するものを、都市の生活空間に採り入れたいものです。

花育実施上の留意点

誰にも納得のできる、愛される花育に育てていくために、留意点を以下のようにまとめました。

- ① 植える、飾るなどの実習の前後のフォローが重要。
- ② 自然と人間の共生、自然破壊の回避・自然保全をつねに念頭におく。
- ③ 現在の花育の内容は未完成である。花育に携わる方には時代に合う望ましいあり方を考え、作り上げようとする姿勢が求められている。
- ④ 花育でもっとも重要なことの一つは花を介した人とのふれあい、地域とのつながりを深めること。
- ⑤ 実施法、実施対象により配慮事項が異なることがある。
- ⑥ 地域性、多様性を考慮する。(文責：編集部)